

『百人一首』 中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力 (三)

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを 雲のいづくに月宿らむ

清原深養父

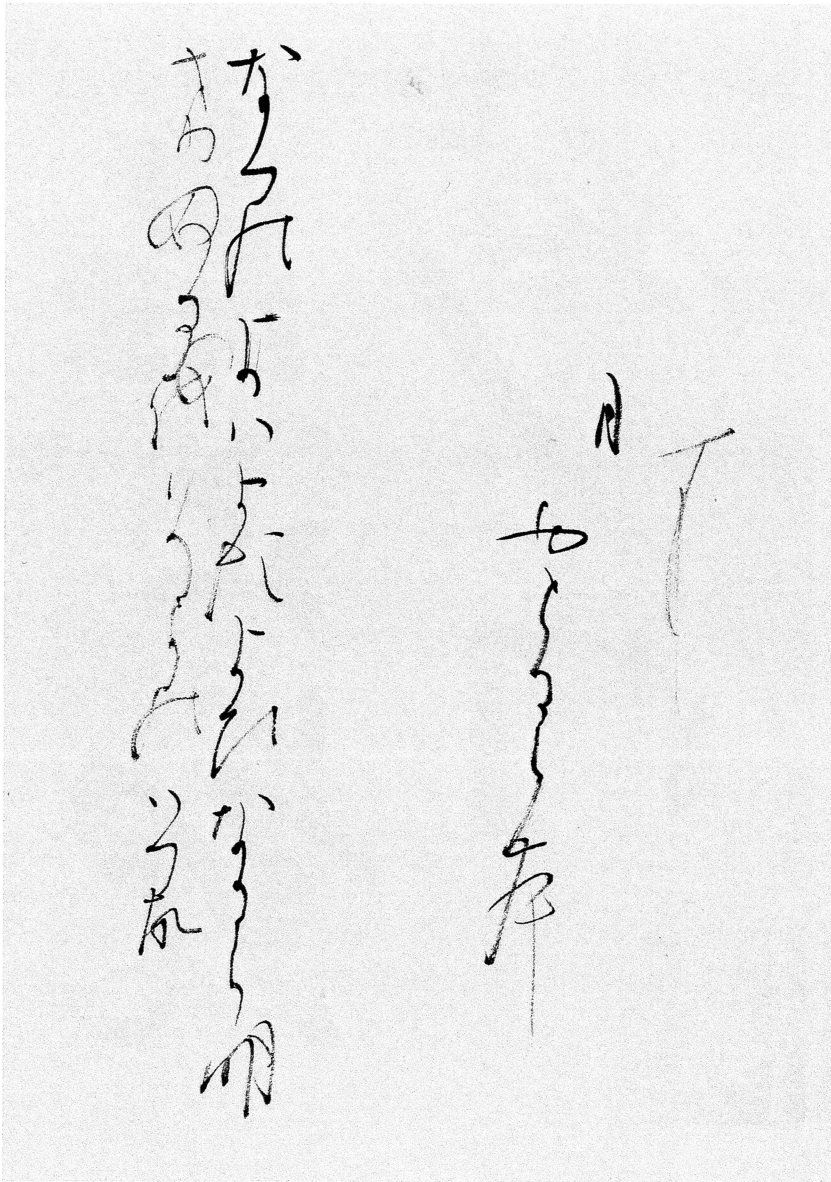
〈歌意〉

「夏の夜は短く、まだ宵だと思っっているうちにもう明けてしまったが、それでは月はいつたい雲のどの辺りに宿っているのだろうか。」

〔出典〕『古今集』(夏・一六六番)

(清原深養父)

生没年未詳。清少納言の曾祖父にあたる。



〈よみ〉

月 耳に
やとるら舞む

① なつ能よハはまたよひな可ら明
希ぬる越 曾ら能いつ故

中村素堂先生の書

晝間欽堂先生提供

素堂先生は「雲」を「そら」に書かれています。(青藍)